

## 教会暦と聖書の流れ

場面はエルサレムへの旅の途中で、マルコ福音書の 3 回目の受難予告(10・32-34)に続く箇所です。「受難の道を歩むイエスに従う」というテーマは先週の福音(10・17-31)から続いています。これまで 2 回の受難予告同様、ここでもイエスの受難の道について無理解な弟子たちの姿が表われていますが、この弟子たちに向けて、イエスの受難と死の意味がもっともはっきりと語られることとなります。

## 福音のヒント

(1) ゼベダイの子ヤコブとヨハネは、ペトロと並んで弟子たちの中でもっともイエスの近くにいた弟子です。彼らは「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが」(35節)とイエスに語りかけます。この遠慮がちな頼み方は、彼ら自身、自分たちの願いがイエスの思いとは違いかもしれないという予感を持っていたことを表しているのかもしれませんが。二人の願いは、「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」というものでした。イエスが何度もご自分の受難を予告していたにも関わらず、彼らはそれを受け入れることができず、ただイエスが栄光を受けることしか考えていません。二人の願いは、その栄光のときに、他の弟子を差し置いて自分たちに特権的な地位が与えられるように、という願いです。



「杯」は普通、救いと喜びのシンボルです。しかし、日本語にも「苦杯をなめる」という表現があるように、苦しみのシンボルにもなります。ここではもちろん「苦しみの杯」の意味です。「洗礼」もわたしたちにとっては救いと喜びのシンボルですが、洗礼(ギリシア語の「バプティスマbaptisma」)の元の意味は「水に沈めること、浸すこと」ですから、死のイメージもあります。ここでは「死」のイメージで語られています。イエスは、自分と同じ苦しみと死を引き受けることができるか、と問いかけます。

(2) 二人の弟子はどこまでこの言葉を理解していたのか分かりませんが、39節で「できます」と答えます。イエスの栄光にあずかるためなら、彼らはどのような苦しみにも耐える覚悟ができていたのでしょう。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる」。ヨハネの最期は正確に伝えられていませんが、ヤコブは実際に後に殉教することになりました(使徒言行録12・1-2参照)。しかし、イエスは報いとして彼らに地位を約束しません。「定められた人々にゆるされる」というのは、「神がお決めになることだ」ということで、あなたにもわたしにも関係ない、というのです。

他の10人は腹を立てます。彼らが腹を立てたのは、自分たちも同じようなことを考えて

いるのに、ヤコブとヨハネが抜け駆けしようとしたからでしょう。そうでなければ腹を立てる必要はないのです。「人よりも先になりたい、上に立ちたい」という願望がいかに強いかに感じさせられます。そこから自由になることは簡単ではないのです。

(3) 「異邦人」は「あなたがた(弟子たち)」と対比させられていますから、ここでは「神やキリストを知らない人々」の意味だと言えるでしょう。「支配し」「権力を振るっている」は明らかに悪い意味で、人々を苦しめる権力の乱用のことです。

「仕える者」はギリシア語で「ディアコノスdiakonos」です。「仕える」は「人のために働くこと」を表す言葉です(なお今のカトリック教会で使われる「助祭」という言葉の原語がこれです)。「僕(しもべ)」はギリシア語では「ドゥーロスdulos」で、こちらは働きの内容よりも「主人」との関係を表す言葉です。ここでは両方とも同じような意味で使われています。「仕える」「僕になる」ということには、「人のためにサービスする」という面がありますが、もう一つには「自分を低くする、自分を無にする」という面もあると言えるでしょう。

(4) 45節には、新共同訳聖書では翻訳されていない「なぜなら」という言葉があります。ここで弟子たちが「仕える者」「僕」になるべき理由が示されるのですが、それはイエスご自身の生き方がそうだから、ということになります。この45節は、マルコ福音書の中でもっとも明確にイエスの使命と死の意味が語られる箇所です。

イエスが来たのは「仕えるため」でした。これは生涯の最後の受難に向かう歩みだけでなく、これまでのイエスの歩み全体を貫く姿勢を表しています。「身代金」と訳された言葉はギリシア語で「リュトロンlytron」です。本来は奴隷を解放するために支払う代金のことを意味したので「身代金」と訳されています。しかし、この言葉はイスラエルの歴史をとおして、神がイスラエルの民をエジプトの奴隷状態から解放した、その神の救いのわざを指すようにもなりました。イエスの死は人々を解放し、命に導くためのものなのです。

なお「多くの人」という言葉は、日本語では「すべての人ではない」というニュアンスに聞こえてしまうかもしれません。しかし、元のアラム語では「すべての人」の意味も含まれているそうです。イエスの十字架がもたらす救いを特定の人だけに限定して考えることはできないでしょう。

(5) マルコは生き方全体から死だけを切り離して、そこに意味があるというのではなく、イエスの死を「仕える」というイエスの生き方の頂点として示しています。このことは大切です。だからこそ、マルコはイエスのなさったこと一つ一つをていねいに伝え、その生き方をわたしたちがしっかり見つめるように促しているのだ、と言えるでしょう。

「仕える」「僕になる」という生き方は、現代では流行(はや)らない生き方でしょうか。わたしたちの社会は、「人は皆、平等であり、皆、上昇志向があり、だから競争に勝つことが大切で、結局勝った者が得をする」という社会だと言えるかもしれないからです。イエスはそのような考え方、生き方に挑戦してきます。「仕える者になる」「僕になる」という生き方の中にこそ、もっと豊かな神とのつながり、人とのつながりがあるのだ…。わたしたちはこのイエスの言葉をどのように生きることができのでしょうか？